

第22回全体会

2016年12月5日開催

## リオ五輪、金メダルの舞台裏 スペシャリストが育つ土壌、ジュニア育成に意欲 体操男子監督の水鳥寿思氏がトークショー

### サンフロント21懇話会 第22回 全体会

静岡新聞 SBS



県東部の活性化策を提言する静岡新聞社・静岡放送「サンフロント21懇話会」（代表幹事・岡野光喜スルガ銀行会長）は第22回全体会を12月5日、沼津市のホテル沼津キャッスルで開いた。リオデジャネイロ五輪で日本体操男子を金メダルに導いた日本体操協会男子監督で強化本部長の水鳥寿思氏（36）＝静岡市出身＝によるトークショーを繰り広げた。

全体会には会員ら約110人が出席した。テーマは「リオ・オリンピック～体操日本金メダルへの真実～」。水鳥氏はリオ五輪の勝因を「予選の失敗を確認しながら一つ一つクリアし、強い気持ちで臨めた」と分析した。東京五輪でも男子監督・強化本部長を務めることが決まった

水鳥氏は「東京五輪、さらにその先までの育成策や強化策を考えることが大切」と意欲を熱く語った。

主催者を代表して大石剛静岡新聞社社長は2020年の東京五輪・パラリンピック自転車競技の伊豆市開催に触れ、「伊豆の魅力を発信する絶好の機会。自転車競技の聖地として発展するための支援をしていく」と述べた。伊東哲夫運営委員長は懇話会について「今後もこの地域をよりよくするために活動し、その役割を担っていく」とあいさつした。

全体会に先立つ運営委員会では17年度活動方針案を協議した。

## 主催者代表あいさつ



静岡新聞社取締役社長

大石 剛

年末のお忙しい中、サンフロント21懇話会全体会にご出席いただき、誠にありがとうございます。この夏のリオデジャネイロ五輪・パラリンピックでの日本選手団の活躍は多くの感動を与えてくれました。スポーツは国を超え、人種を超え、私たちを元気にしてくれます。

当懇話会は本年度の活動目標の一つにスポーツを通じた地域創生支援を掲げています。2020年の東京五輪・パラリンピックでは伊豆市で自転車競技が開催されます。国内外に伊豆の魅力を発信する絶好の機会です。伊豆地域への経済効果を期待するとともに、自転車競技の聖地として発展していく支援にも取り組みたいと考えています。またJ3参入を果たしたアスクラロ沼津への支援も目標に掲げており、広域的な地域活性化に必ず貢献するものと思っています。

トークショーのゲストにお招きした日本体操協会体操男子監督で強化本部長の水鳥寿思さんはまだお若いですが、リオ五輪で体操男子団体を金メダルに導きました。裏話を含め貴重なお話が伺えるものと期待しています。

## 懇話会代表あいさつ

サンフロント21懇話会の活動に対し、絶大なご支援とご協力を賜っていることに厚くお礼申し上げます。今年は想定外のことがあまりにも多い一年でした。英国のEU離脱、米国大統領選でのトランプ氏当選、韓国の朴大統領を巡る疑惑などです。今後、世界はポピュリズム（大衆迎合主義）の台頭による民主主義の在り方が問われてくるのではないのでしょうか。来年、我が国の政治経済にどのような影響が起きるか、今後の動向を注視しなければなりません。

私ども懇話会は民主主義によって選ばれた代表ではありません。この地域をこよなく愛し、どのように発展させたらよいのかを考えている仲間たち・住民・事業者たちの集まりです。そして地域社会や行政に対して提言し、この地域をよりよくするために活動しています。

来年度の行動計画はまだ審議段階ですが、東京五輪自転車競技の伊豆市開催、アスクラロ沼津のJ3昇格、世界ジオパークへの新たな申請、この3つが私どもの活動を後押ししてくれるものと思っています。

サンフロント21懇話会運営委員長  
(伊東法律事務所所長)

伊東 哲夫

## 第22回全体会トークショー

会場／ホテル沼津キャッスル

# 「リオ・オリンピック ～体操ニッポン 金メダルへの真実～」



ゲスト・  
日本体操協会  
体操男子監督・強化本部長  
**水鳥 寿思氏**



聞き手・  
SBSシニアプロデューサー  
**澤木 久雄氏**

## 予選とは違い緊張した決勝の舞台 微調整にとどめ、開き直って臨む

——静岡市出身の水鳥寿思さんは体操男子日本の代表監督としてこの夏のリオ五輪で見事団体での優勝に導かれました。内村航平選手や白井健三選手が脚光を浴びる中、彼らを後ろからそっと見守っているという印象を受けましたが、きょうは前段でそのリオ五輪のお話を伺い、後半は日本体操界の今後について伺いたと思います。団体優勝おめでとうございます。体操は「日本のお家芸」と言われ、優勝への期待も大きかった。正直、プレッシャーを感じていられたのか、ホッとされたのか、どちらですか。

水鳥 昨年の世界選手権でチーム優勝していましたから実力的に優勝できるレベルにあったことは間違いありませんし、自分も世界で一番強いチームだという認識はありました。周りからは「プレッシャー凄いでしょね」と言われましたが、私が選手のころも成功しても失敗しても自分の責任だと思ってやっていたから、できることは当然やりますが無駄なプレッシャーをかけてもしょうがない。最終的に舞台上上がったら選手が自分でやるしかないの、それまでに私ができることをやり、本番はある意味、開き直って臨みました。

ただ決勝の日は私もびっくりしたのですが、ずっと緊張しっぱなしで、それが選手に伝わらない

ように必死でした。予選まではこれまでの世界選手権と変わらなかったのに決勝は違いましたね。

——皆さんもご承知かと思いますが、本命視されてはいましたが、団体の予選は何と4位通過で苦戦を強いられました。あの時は田中選手や山室選手が平行棒で落下し、内村選手でさえ鉄棒で落下、白井選手も床でラインオーバーしました。あれはどうだったんですか。

水鳥 正直、想定外でした。原因はいくつかあるのですが、最初の私の持っていき方がよくなかったと反省しています。五輪はすごく特別なもので緊張したものを平常心でやらなければなりません。演技の順番が朝の1班で、観客はまばらでライバルもいないという環境で始まりました。私的には「上げきれなかったのかな」と感じた部分があります。

内村選手のミスは鉄棒に炭酸マグネシウム（白い粉）が全然付いていなかったということもあります。白井選手の床は台の跳ね方の変化をつかみきれなかった。そんなミスが重なって想定外の4位という結果を招きました。

これらを踏まえて決勝では予選の時に炭酸マグネシウムが付いていなかったことを組織委員会に指摘し、選手の安全にもかかわることで決勝では付けてもらいました。白井選手が失敗したり・ジョンソンも助走をゆっくり走って内側に収めるようにしました。何が原因かに対し一つ一つクリアできるよう、中一日しかありませんで

したが、調整できたかなと思います。

### 金メダルを獲る強い気持ちが大事 最終の床は内村の体力回復を優先

——中一日で微調整できたというか、調整能力が選手にあったということが金メダルの要因だったということですね。決勝の本番前は監督としてどのような指示をされましたか。

水鳥 まずは「上げきれていなかった」に対して、海外の選手が強い気持ちで臨んでいることを踏まえ、自分たちが本当に金メダルを獲るといふ強い気持ちで臨めるかどうかだと選手、コーチに伝えました。例えば田中選手は昨年、鉄棒と平行棒で失敗し、これまでも大事な場面でミスがありました。その後も練習があまりできていなくて調整調整で来て、本人からも「代表から外してほしい」という申し出がありました。「じゃそうするよ」と約束はしたのですが、練習では一番と言っているくらい強い気持ちが出ていました。後ろ向きに考えるのはやめて彼を信じようと思い、ミーティングでは「これまでやってきたことをやり切ろう」と話しました。

——強い気持ちを持つことが何よりも大切だと強調されたわけですね。

水鳥 それが通用するかどうかは状況によって違うと思いますが、予選の結果を見てそういうところが不足していたと感じました。選手は選手で予選と決勝の間に位置に一日しか練習日がなかったため全員が失敗したところを確認し、成功させてくれたのです。しかもトップとは微差でしたので、「これならいける」と、皆さんが心配されるよりも強い気持ちで臨むことができました。

——監督というのは競技場のどちらで見ているのですか。

水鳥 日本は所属チームでの強化が中心で、代表入りや強化選手に指定されたら合宿に参加するという形を取っていて、代表監督が常に見ているわけではありません。ですから今回は所属チームのコーチが近くにいる方が選手もやりやすいだろうと思い、コーチウェイティングエリアの辺りにいて、中継役となって会場を行ったり来たりしていました。得点が合っているかどうか、もし失敗したら次の演技をどうするか、場合によってはサブ

会場にいるほかの選手を呼び寄せなければということもあります。また競技コートにはコーチが2人しか入れません。選手のケアをしている時などは得点に対する質問は4分以内というルールがありますので、コーチに対する指示が必要になります。今回はありませんでしたが、結構気を遣います。

——決勝は予選での順位が低かったため、本来なら床から入って鉄棒で終わるのが望ましい順番とされていますが、床が最後に。床って一番疲れるとお聞きしていますが。

水鳥 予選4位だと鞍馬からのスタートです。たまたま予選もそうでしたし、鞍馬スタート、床フィニッシュは練習でも結構やっていました。僕は意外といい順番じゃないかととらえました。鉄棒というのは内村選手も落下するぐらいリスクが大きい種目ですので、プレッシャーのかかる鉄棒を一つ前に終え、一番きつくても比較的自信のある床で終わるのもいいんじゃないかと考えました。きつい床の後に演技がないということは床をやり切れればいいということになります。より状況をプラスにとらえていこうという空気になりました。——その床は演技順を変え、一番強い白井選手をトップに起用しています。これが見事に的中し、16点台という高い得点をたたき出しました。

水鳥 内村選手の体力回復を最優先に考えた選択です。白井選手は鉄棒がなかったので、鉄棒を終えたばかりの内村選手をできるだけ後回しにし、インターバルを置いたのです。私としての一番のポイントは田中選手。うまくいってくれてかなりの手ごたえがありました。

### 不安だからと難易度落とすのはダメ 「燃え尽き」克服した内村の個人総合

——ライバルの中国は日本とは対照的に決勝でミスが重なりました。小さなミスも怖いけれど、前向きな気持ちで臨んだことが大きかったのでは。要は不安だから演技の難易度を落とそうというのはダメだということですね。

水鳥 そこはどんな練習をしてきたかによります。練習がちゃんとできていないのに強気でいこうというのはナシです。今回は練習を見ていて最終的にこのままでいいんじゃないかという判断ができ

ました。状況によっては確かに強気でいきたくても練習を見て我慢するという判断もあったかと思いますが、技を変えたら変えたで代わりの何かを入れないと難度が足りなくなるとか、2番目の技が1番目に来るとリズムが変わってかえって難しくなるということがあります。今回に関しては回避して落としてやるよりも、そのままいった方が確率的に高いという結論に至りました。

——その判断がピタッとはまりました。団体優勝は3大会ぶりでお家芸を維持されたわけですが、その後の個人総合はエース内村選手が金メダル。こちらは当然という思いでしたか。

水鳥 そうですね。ただ心配していたのは団体決勝の最後の床で採点を待つとき、ライバルのロシアには絶対に覆せない点が出るだろうと確信できて喜んでいい状況だったのに、きつそうで膝に手をつけて立ち止まったりしていたので本当に心配しました。彼は往きの飛行機乗り継ぎの際に「団体優勝が取れたら自分はどうなるかわからない」と言っていた。「燃え尽きちゃってダメかも」と。内村選手には「団体は確かに重要だけれど、日本がもう一つ次のステージに行くには個人のメダルも大事だ」と励ましましたが、それでも団体決勝後の彼のしぐさや言動からちょっぴり心配していました。

### スペシャリスト強化に踏み込む ジュニア世代育成の種まきも

——代表監督と強化本部長になったのは2012年、まだ32歳でした。昨年の世界選手権、今回のリオ五輪と、ここ数年間、代表監督としてどんなことに気を遣ってこられたのですか。

水鳥 指名されたのが12年、強化を始めたのは13年4月からです。主に3つのテーマがありました。一つはスペシャリストの強化。これまでは内村選手のような個人総合のオールラウンダーが日本の中心で、10年前は世界の中心でもありました。その後、団体で全員演技しなくてもいいことになり、分業というか、オールラウンダーも必要だが種目別に強い選手がチームに必要という状況に変わりました。個人総合の選手が種目別も総なめしていた状況から個人総合の選手は個人総合でしかメダルが取れなくなったのです。日本は団



体制度への対応の遅れや伝統ある個人総合への思いから、大胆なスペシャリストの強化ができていなかったため、とにかく種目でガンと得点が取れる選手を入れていこう、個人総合がまったくできなくてもチームに入れていこうというのがまず一つです。

次に選手主体であるという考え。自分の選手時代、監督が何をしていたのかわからなかったぐらいで、舞台に上がった選手は自分で戦うしかありませんでした。最先端の技はその選手にしかないのですから。そこで選手同士でいかに情報を共有し、例えば4回ひねりはこういう感じだというようにコミュニケーションできることが非常に大事だと思いました。選手に影響力をもたらすのは監督よりもキャプテン。内村選手に対しては、私が合宿計画などを考えますが彼に確認を取ります。彼はもともと背中が引っ張っていくタイプなので、自分が内村選手に問い掛け、内村選手から選手に訴えていくことで選手同士で盛り上がる雰囲気を作ります。その方が絶対に強いチームになると心掛けてきました。

三つめはジュニアの育成です。これまではトップ選手が所属するチームの監督・コーチが日本代表監督や強化本部長を兼任するような形でやってきました。当然トップ選手は大事ですが、仕組みや指導の面で貢献度が高いのはジュニアの方じゃないかと感じています。下をしっかりと育てることが結果的に日本の底上げになると思います。自分は所属チームとは関係のない第三者の立場で入ったことにより、リオのその先につなげる種まきやシステムをいかにつくるかが役割かなと考えています。

——3つのポイントはいずれも大事ですね。これまでの常識を覆すというか。

水鳥 そここまで高い志をもってやっていたわけではありません。自分が選手を引退したのは2012年でした。まさか半年後に強化本部長にいけと言われるなんて思いませんでした。とにかく素直に何が大事か、選手の時に何を思っていたかを強化のテーマに掲げればいいのかなど。それが結果的にこれまでのスタイルと違い、弱い部分を底上げ強化することにつながったかなと思います。ここ3年やらせてもらっているいろいろなところが見えてきたというのも正直なところあります。

### 東京五輪に向け続投決まる 制度変更なら日本に追い風

——日本体操界はいい意味で軌道修正できているといってもいいのでは。

水鳥 私が続けることが正式に決まったのは確かですが、やるにしてもそのままがいいということはありません。例えば内村選手があれだけの高演技をしながら2位の選手とは0.099しか差がないことは、このままやっていたら逆転されるということでもあります。団体だけでなく種目別まで見据えて総合力でやらなければならないということもあります。内村選手がプロ宣言するなど状況の変化もあります。もしこれまでけん引してきた内村選手がいなくなったらどうするかということまで考えなければなりません。いろんなことが変わる一つ一つについて、リオまでの感覚を引っ張るのは逆によくないと思います。

ジュニアにしても種まきが実を結び、高校生が上がってきています。そういった意味で東京五輪は大事ですが、五輪後に強化費が減る可能性とか、あるいは体操選手を目指す子供が増えた時に環境が整っているか、そういうことも大事になってきます。東京に向けてと同時に、その先のことを考えるのが大切ですね。

——オールラウンダーとスペシャリスト、どちらの養成が大変ですか。オールラウンダーってある意味、天才的な能力が必要なのでは。

水鳥 そんなことはないと思います。内村選手や白井選手は同じナショナルチームの中でも一番練習をしています。彼らは「自分は天才ではない」と言っていますが、私もそうだと思います。映像のデータベースの再生回数は圧倒的に多く、シス

テムを作った国立科学スポーツセンターの研究部の担当者から改善策を検討する会議に参加を要請され、意見を述べているぐらいです。普段からの探求心や練習に対する姿勢が、結果的に素晴らしい演技につながっています。オールラウンダーであれスペシャリストであれ、そこが大事だと思います。後は制度的に個人総合をやる前提でいろいろな大会や組織が組まれているので、スペシャリストを育てる土壌をどうやって作っていくかが課題です。単純にスペシャリストが育つ環境に傾斜するのではなく、バランスを少し寄せてあげるといっか、個人総合の選手だけれど得意な種目を武器として持つということです。3種目ぐらいしかやらない選手が必要というよりも、個人総合をやりながらも平均的ではなく強い種目を持ってもらいたいと思っています。

——先ほど2020年東京五輪でも強化本部長をされると伺いました。いろいろなことを試されるとはありますが、あえていえば種目別で勝てるスペシャリストを育てるといえることですか。

水鳥 正式にどうなるか分かりませんが東京五輪では団体が4人になります。団体に入らずに出場できる選手枠も2人設けられるので、そこには純粋に種目に強い個人でメダルが取れる選手を出していきたい。つまり個人総合の選手と種目別の選手の双方が必要になってくるのです。

リオは5人エントリーで3人演技したわけですが、東京では4人エントリーで3人演技となるでしょう。日本には有利だと思います。2つ理由があって一つは海外がスペシャリストに傾斜しているのに対し、日本はまだまだ個人総合が強い。4人のうち3人演技しなければならないということは、今まで2種目ぐらいで強い選手を2人入れていた海外のチームはバランスが悪くなります。一人当たりの演技数が増えるということは安定的に演技ができる選手が多い日本の方が団体戦を戦う上では有利と言えます。ロンドン、リオと団体が5人から4人となり、プラス2人で最大6人となれば日本のような強豪国は全体的な出場人数が増え追い風になるのです。

## 中学体操部激減を民間クラブが補う 高校生が技を磨く施設を知事に要望

——2020年に向けての発掘作業は順調にっていますか。

水鳥 この4年間でジュニア強化選手は28人から34人まで拡大し、今まで日本体操協会が認定した選手だけを対象に東京で行っていた強化合宿をブロック合宿として、東京以外の地域でナショナルチームの選手とコーチが出向いて地元の強化選手やコーチと交流しながら合宿し、地域の底上げを図る。そんなことも始めています。東京に来られる権利があったとしても地元のクラブの練習を抜けれないという事情があったり、金銭的な問題で東京に何度も行けないという子も実際にいますから、こちらから行くというのも重要だと思います。

——ジュニア強化選手には静岡の水鳥体操館の生徒もいますね。

水鳥 まだ6年生ですが、先月行われた小学生の大会で全国優勝し、昨年ジュニアナショナルチームに5年生で入りました。最近は水鳥体操館を中心に静岡県内のジュニア選手が全国の2割ぐらゐを占めるほどに育ってきています。

——イメージ的には学校体育で伸ばすよりも民間のクラブが一生懸命育てている印象ですが、その辺のバランスはいかがでしょう。

水鳥 おっしゃる通りです。私が通っていた学校にも体操部があったのですが、どんどん廃部になってしまい、20年前の半分以下、3分の1ぐらいになっています。やはり専門的な指導が難しいとか、アリーナを他の競技と取り合うような形になり、廃部が進んでいるようです。一方でジュニアの民間クラブとして夢を持った指導者がこぢんまりとしたクラブを立ち上げ、中学までは指導をするというのが一般的です。ただ高校生が専門的な技を磨く施設を探すとすると対応ができなくなるため、高校の体操部で強いところに進学するという形になります。できるところは限られます。静岡県内でもジュニアの選手は残念ながら県外の学校に流出しており、私とその第一号となってしまいました。

——川勝知事に体操の専門施設を造ってほしいと

陳情されたそうですね。

水鳥 知事が先月の四国国体のエキシビションを見学に来られたので、その場で静岡県では人材の流出が大きいというお話をさせていただきました。数年前、静岡産業大学に立派な体操場ができたのですが、もし県内の高校にそれができたとしたら、強豪選手が日体大や順天堂大などに流出せず、県内に残って産業大に進めます。高校まで練習できる環境が大事で、ぜひ考えていただきたいとお伝えしました。

知事はかなり前向きでした。体操界では福井県鯖江市が有名で静岡県から行っている選手もいます。鯖江市が体操に特化することにより市内の小中学校の廊下に鉄棒が置かれ、小学生が発表会のような形で活用しています。体操が地域に根付き、福井県の小学生の運動能力は全国1、2位になったそうです。このような影響をみると、強化育成のみならず、広くとらえれば地域貢献できる点があると思います。

——国際化という視点では体操協会の渡辺専務理事が国際体操連盟の会長に就任されましたが。

水鳥 渡辺さんは体操の普及とスペシャリスト強化に貢献されており、私の考えと非常に近い方です。驚くことに会長になるためのマニフェストとして、体操はキングオブスポーツだからいつの日かサッカーを超えるスポーツにすると掲げています。ワールドスポーツランキングで体操は24位ですが、それを2030年ぐらいまでに10位にし、いつの日か1位にするんだと。そういうことに私も少しでも貢献できるよう活動できればいいなと思っています。

渡辺さんは体操だけをやってきたのではなく一歩引いてスポーツビジネスを手掛けてこられた方ですので、採点方法にも情報技術を駆使することを提案し、今富士通と共同開発で技の精度を判定したり誤審を防いだりするという取り組みを進めています。東京五輪で新しい手法・提案が採用されるかもしれません。

## いかに集中するか、自分との闘い 東京五輪の先も見据えて取り組む

——体操も大きく変わっていきそうな感じがします。自分一人での自己完結型のスポーツだとは思

いますが、それこそ鉄棒でぐるぐる回っている時などは何を考えているのですか。

水鳥 選手によって異なると思いますが、私は気が散りやすく結果を早く知りたがる焦るタイプだったので、自分で意識するポイントを試合前に一通り書いて確認しながら集中していました。最終的には人との勝負なんですけど、いかに自分に勝てるかが大事で、自分が今何を考えなければならないかに集中できるかですね。

——今行っている演技を完成させることにすべて集中するということですね、

水鳥 内村選手の例ですが、彼はライバル選手と死闘を演じていてもその選手の演技や得点は知らなかったと言います。観客の歓声などでいい演技をしているなど気づいたぐらいで、それだけ自分に集中していたようです。

面白いことに今回JOCが選手アンケートを用意し、私が体操選手の分を取りまとめたのですが、「勝ちたいという闘争心はありますか」という問いに対し、多くの選手が「ない」と答えていました。私はどちらかというと「勝って認められたい」タイプでしたが、今の選手は違うようです。先日スポーツ心理の先生と話す機会があったのですが、トップアスリートになればなるほど自分との闘いになってきて、他者との闘いに興味がなくなるそうです。全種目がそうとは限りません。闘志むき出しで相手に威圧感を与えるような競技には必要かなと思いますが、体操の競技特性からすると自分に集中できることがすごく大事ですね。

一方で加藤選手があれだけ団体に活躍したのに、最後鉄棒で失敗して11位でした。鉄棒にいく前に「いくらいいい演技をしてもメダルにはぎりぎり届かないと知り、試合中に悲しくなった」と言うんです。そういう外的要因に左右されるなら、一方でエンジンをぶら下げればやる気になるだろうと思う反面、それがすべてになってしまったら状況に左右され、本来できる演技ができなくなってしまいます。

——スポーツは基本的に闘争心が大事だと思っていますが、それ以外に自分との闘い、自分をいい意味で追い込んでいけるかが一流になればなるほど重要なんですね。

水鳥 体操は振り返りとかも大事で、自分の演技を練習の後にしっかり見直します。内村選手の再

生回数が多いという話もそうですが、本当に突き詰めて自分には何が大事か、明日はこうしようという考えが内側から出てくるようなモチベーションが大事なかと今の選手を見ていると感じます。——最後になりますが、体操界を引っ張るうえでの抱負を聞かせてください。

水鳥 2020年までの強化本部長が決まったのは一昨日でほやほやです。これから年明けにかけてゆっくり考えていこうと思います。まだ明確な組織づくりや目標は定まっていませんが、総合力で勝つということが大きなテーマになるのはわかっていますので、最後の種目別まで高いモチベーションを持って競技に臨めるか、そこに向けての体力や意識づくりがすごく大事になってくると思います。ですからリオがよかったからこのままでいいんだということではなく、今何が大事かをしっかり考えていきたい。もう一つは東京五輪の先、あるいは東京五輪を見た子供たちに対し、どんな準備ができるかを大きな柱にしていきたいと考えています。

私は何もわからない状態でいろいろなことを勉強させてもらいながら4年間やらせてもらいました。それらがやっとなりにしていけるタイミングかなと思っていますし、やはり東京五輪ですから見ていただく皆さんの熱い期待にも応えたいと思います。

——まだまだお若いですし、ますます活躍されて日本体操界のためにご尽力ください。ありがとうございました。

### ＜ゲスト・プロフィール＞

■みずとり・ひさし 1980年静岡市生まれ。関西高校～日本体育大学。両親ともに元体操選手でクラブを経営。6人いる兄弟も、そのほとんどが体操選手というまさに体操一家で育つ。華々しい成績の兄弟に対し、結果が出ない苦悩の中、高校進学をきっかけに実力をつけ始める。3度にわたる大けがで選手生命を危ぶまれたが、克服して日本代表に選出。アテネ五輪団体決勝で吊り輪に出場したほか、世界選手権でも数々のメダルに輝いた。ロンドン五輪の最終予選を最後に引退。史上最年少の32歳で日本体操協会の体操男子監督・強化本部長に抜擢され、2015年世界選手権では37年ぶりの団体金メダル、リオ五輪では自身が選手として獲得したアテネ五輪以来12年ぶりの団体優勝に導いた。

2016年11月15日開催

会場／みしまプラザホテル

## 『第22回東部地区分科会』



「サンフロント21懇話会」（代表幹事・岡野光喜スルガ銀行会長）は11月15日、第22回東部地区分科会を三島市のみしまプラザホテルで開いた。伊豆市が自転車競技の開催地となる2020年の東京五輪・パラリンピックを控え、スポーツを地域の新たな産業に発展させ地域創生にどうつなげていくかを講演やパネル討論を通じて模索した。官民の会員ら約150人が参加した。

主催者を代表して北村敏廣静岡新聞社専務は「本日のテーマは地域におけるスポーツ産業の拡大。スポーツが持つエネルギーを地域の創生・発展に結び付けたい」とあいさつし、懇話会と開催地を代表して豊岡武士三島市長は「スポーツ産業は東部伊豆地域発展のキーワード。地域が元気になる提案をいただきたい」と期待を込めた。

基調講演の講師はスポーツ庁参事官付参事官補佐の松山大貴氏。「東京五輪・パラリンピックに向けたスポーツ産業の拡大」をテーマに、観光や食とスポーツ、スポーツとITなどとの融合を紹介し、東京五輪後の25年までを見据えて「これまでのスポーツについての固定概念やカテゴリーを考え直していくことが重要だ」と提起した。「スポーツ産業化と地域の創生」を掲げたパネル討論では、日本政策投資銀行地域企画部の桂田隆行氏や羽立工業（湖西市）の中村哲也社長、県東部地域スポーツ産業振興協議会専務理事の宮崎眞行氏が意見を交わした。コーディネーターは青山茂氏（シード副社長、サンフロント21懇話会TESS研究員）が務めた。

## 主催者代表あいさつ



静岡新聞社代表取締役専務

北村敏廣

サンフロント21懇話会東部地区分科会にご来場いただきまして誠にありがとうございます。米国大統領選の激震から1週間。日本そして静岡県においても今後米国との通商経済問題や同盟関係がどのようになっていくかなど当面トランプショックから目が離せません。

本日のテーマは「地域におけるスポーツ産業の拡大」です。リオ五輪・パラリンピックでの日本人アスリートの活躍はまだ記憶に新しいところですが、スポーツは人々に感動と元気を与えてくれます。そのエネルギーを地域の創生・発展に結び付けられないか。2020年東京五輪・パラリンピックでは自転車競技が東部地区で開催されます。基調講演では日本のスポーツ産業の拡大、地域におけるスポーツ産業の課題などを取り上げていただき、パネル討論を通じて東部地区がスポーツで元気になるご提案をいただければと思います。

22年目を迎えた懇話会活動へのご理解ご支援に改めて感謝申し上げますとともに、一層のご協力をお願いいたします。

## 開催地・懇話会代表あいさつ

4年後に迫った東京五輪・パラリンピックでは自転車競技が伊豆地区で開催されます。東部地区では3年前、県主導により静岡県東部地域スポーツ産業振興協議会（イースポ）が設立されました。県東部20の市町と経済界で構成され、昨年度から三島市が事務局を受け継ぎました。アスルクラロ沼津のJ3昇格といううれしいニュースがありましたが、スポーツで地域経済の活性化を図り、スポーツツーリズム商品の開発、合宿の誘致、大会の開催など新たなスポーツ産業を創出する組織として活動しています。

イースポの活動はまだ東部地域全体に浸透していないのが実情かと思いますが、スポーツ産業の拡大は東部伊豆地域発展のキーワードです。その意味では本日の分科会は非常にタイムリーであり、今後も関連団体やサンフロント21懇話会とも連携して地域のスポーツ産業創生に向け、一丸となって取り組んでまいりたいと考えています。この地域の持続的発展にはスポーツは不可欠であり、スポーツを産業化させていかなければならないと思っています。



三島市長

豊岡武士

## 基調講演

# 「東京オリンピック・パラリンピックに向けたスポーツ産業の拡大」

講師：スポーツ庁参事官  
(民間スポーツ担当)付参事官補佐  
**松山大貴氏**



### スポーツ行政に地域経済活性化が加わる

スポーツ庁ができて1年が経ちました。スポーツ行政はこれまで文部科学省を中心に行われてきましたが、経済産業省、外務省、厚生労働省にも関連するところがあってバラバラな一面がありました。スポーツ行政の一元化、一本化を目標に創設されたのがスポーツ庁です。どんな仕事をしているかといいますと、従来からの学校体育を中心に高齢化社会を踏まえたスポーツによる健康増進、オリンピックを軸とした国際力・競技力の向上、そしてスポーツを通じた国際貢献などがあります。新たに加わったのがスポーツによる地域の経済活性化です。鈴木大地長官（ソウル五輪金メダリスト）も就任時に「スポーツビジネスをしっかりとやろう。スポーツで稼ぐ世界を作ろう」と強調しました。これまでは「スポーツでお金を稼いではいけない」という風潮があり、ビジネスの側面がないがしろにされていました。スポーツ庁ができ、私のように経済産業省から出向してスポーツ産業を担当する者がいるわけです。スポーツを中心に据えた国家戦略の実現ということで、経済はもちろん外交、地方創生、地域活性化などの領域にも及んでいくような課題の解決を目指しています。それだけスポーツには多様性があり、スポーツをツールにして様々な取り組みを進めていこうとしています。

スポーツの市場規模は2002年と2012年を比較すると1.5兆円下がっています。3.2兆円あったスポーツ施設業が2.1兆円に、小売りは1.9兆円から1.6兆円、興行・放送はほぼ横ばいです。施設業

でいうとゴルフが大きく、政投銀で出している数字だと半分に近い5000億円まで下がってしまいました。スキーとかテニスも下がっています。これに引きずられるようにして小売りも落ち込んでいます。ゴルフやスキーはウェアを含めて道具をたくさん買わなきゃなりませんから。こうしたスポーツ市場の現状をどう変えていくのか、我々は昨年10月から様々な議論をしています。

### スポーツで稼ぎ、収益をスポーツに還元する

キーワードの一つが従来の概念にとらわれずスポーツで稼ぎ、その収益をスポーツに還元するシステムの実現です。「言うは易し」の世界かもしれませんが、これから2020年の東京五輪・パラリンピックに向けて民間企業も含め関心が高まり、お金が集まってきます。競技力強化をはじめ予算も増額されるでしょう。でも2021年以降はどうなりますか。追い風を受ける2020年までの間にしっかりとしたシステム、お金を稼いで収益を還元していくシステムを作る必要があります、本当の勝負は21年以降です。

例えば1964年に東京五輪がありました。経済成長期でもあり、インフラ整備など莫大な投資が行われました。鈴木大地長官が就任当時の雑談の中で、水泳連盟の予算は64年と65年では20分の1になったと話していました。期待されていたのに惨敗したという側面があったのかもしれませんが、これを機に水泳連盟はいろんなことをやるようになったそうです。ですから今、この好機を逃すととんでもない状況になるんじゃないかと危機感を持っています。

## コストからプロジェクト、ビジネスの観点で

もう一つの大きな概念は負担から収益へ、コストセンターからプロジェクトセンターへということであり、先ほど申し上げましたようにスポーツ行政そのものが学校体育の延長にあり、公的サービスの一環とみなされて国費などを投入して進行してきたことに伴う弊害です。例えば2002年のW杯サッカー、日韓共催の時にいろんなスタジアムが作られました。今、黒字化しているスタジアムが一体いくつありますか。ほとんどというか1カ所を除いて赤字です。W杯開催のため施設整備は不可欠ですが、残念ながらコスト部分をどうやって収益に還元していくか、収益を得ていくような仕組みにするのかという問題意識を持ってませんでした。ですから我々はそのコストセンターから収益を上げていくプロジェクトセンターへ、つまりプロジェクトすることによって継続性のある取り組みにしていこうとビジネスという観点で議論しております。人々のニーズに応える付加価値あるサービスを提供し、カスタムエクスペリエンスを高めるスポーツ産業の振興を促していきます。顧客目線でスポーツをとらえてビジネスにしていこうという考え方です。スポーツ産業には成長余力があります。しっかりと顕在化させて基幹産業へと進め、市場拡大やスポーツ環境の充実、そして人口の拡大へと好循環を生み出していくという大きな目標を持っています。

6月、安倍政権の成長戦略に初めてスポーツ産業が取り上げられることになりました。新たな有望成長市場の創出ということでIoT（もののインターネット）や健康立国などと同じ並びで入っています。直近での市場規模5.5兆円を2025年までに15兆円にするというかなり野心的な数字を掲げています。実施比率も40%を65%へと高めていくことが目標となっています。

実現に向けての成長戦略には3つの柱があります。スタジアムアリーナ改革、スポーツコンテンツホルダー経営力強化、そして新しいビジネス市場の形成を目指す取り組みで、ハードとソフト、市場拡大の策というものです。この成長戦略はスポーツ庁と経済産業省が完全にタッグを組み、2月からスポーツ未来改革会議を立ち上げ、5月に

は中間報告を取りまとめています。この中では5つの課題を示しています。スタジアムアリーナの在り方、スポーツコンテンツホルダーの経営力強化、スポーツ人材の育成・活用、有望・新たなビジネスの創出、そしてスポーツ参加人口の拡大の5つです。

市場規模は5.5兆円を2020年までに10.8兆円、2025年までには15.2兆円まで拡大していきます。スタジアムアリーナは現状2.1兆円を3.8兆円まで伸ばし、プロスポーツも約3000億円を10年かけて1.1兆円まで伸ばします。例えば大学スポーツの箱根駅伝は人気コンテンツですが、ビジネスとしては広告代理店などに限られ、大学側の選手強化とかまで回っていません。こうした魅力的なコンテンツの価値を顕在化させ、新しいマーケットに育てていきたいと考えています。スポーツツーリズムなどの周辺事業も期待分野であり、さまざまな取り組みを行って3.5兆円アップの4.9兆円に、スポーツ用品分野も実施率の向上を含めて1.7兆円を3.9兆円にしていこうという数字になっています。

## 「する」から「見る」「支える」へ

具体的に説明します。スタジアムアリーナはスポーツ施設ととらえてください。これまでのスポーツ施設は「する」ために作られてきました。「する、見る、支える」とよく言われますが、日本では学校体育が中心となって進められてきた経過がありますので、行政も「する」を重視してきました。これに対して「見る」を含めたものを考えていこうじゃないかというのが今回の大きなポイントです。例えばサッカーですが、まだまだ陸上競技場の中でサッカーをしているチームがたくさんあります。なぜ陸上競技場が多いかというと、国体の開催に合わせて施設整備がされてきたからです。そして国体後は市民サービスのために開放し、スポーツをしてもらう場を提供するという考え方になっています。もちろん「する」は重要な要素ですが、米国や欧州を見るとエンターテインメントとして「見る」を徹底的に追求した施設ができています。見るスポーツを意識し、エンターテインメント、ビジネスを意識した施設を整備して、まちづくりの中心に据えていったらどうだろうかということです。スポーツ施設が核となってそこ

からまちを作っていく考え方で、スマートメニューともいわれています。サッカーの専用スタジアムといっても、Jリーグで年間20試合前後、欧州でも年間30試合程度ですから稼働率としてははしたものです。サッカーだけで収益性を考えるには無理があります。そこを欧州などではショッピングセンターを併設したり、ホテルや病院を設けたり、さらには高齢者の福祉施設、オフィス、コンベンションセンターなどを加え、複合的に同時に開発することによって、収益性をしっかりと担保しつつまちづくりのコアとして機能させていくことが盛んに進められています。昨年できた米国のアメリカンフットボールの専用スタジアムは建築費1500億円ですが、行政側の拠出金のほかに民間資金が相当入っています。ここには最先端のWi-Fiが整備され、アプリでチケットや駐車場の予約ができ、トイレの空き状況が分かるようになってきました。民間の知恵を使いながらきめ細かいところまでサービスを試みています。民間の側も実証事業としてスタジアムを活用していることになります。

国内はまだまだこれからですが、好例は今年大活躍した広島カープの本拠地、広島市民球場です。スタジアム自体にいろんな施設が入っているわけではないのですが、球場を新しくする際に周辺を含めてマンションの開発などさまざまなことがされていて球場内には「見る」ことを意識した設備を施しています。バーベキューができる座席やカップルで座れる座席などお客さん目線で楽しめる空間を提供しています。先例には巨人の本拠地・東京ドームもあります。

### 成長を妨げるのは固定概念や前例主義

我々はスタジアムアリーナ推進官民連携協議会を立ち上げました。スポーツ庁と経済産業省のほかにはまちづくりには欠かせない国交省にも入ってもらっています。民間資金とか経営能力、技術的な能力など官民連携となるような取り組みを進めていくために必要な情報をここから国のクレジットでどんどん出していこうということでワーキンググループを立ち上げ、スタジアムアリーナ整備のための考え方を近く出す予定です。今後は資金調達などさまざまな課題を随時、情報を発信しな

がら推進してまいります。加えてスポーツの成長産業化を妨げる可能性がある施設に対する固定概念や前例主義のマインドチェンジにも力を入れます。これまでとは異なる考えを持ち、民間的な発想で施設整備と取り組んでいきます。公費で施設を作ったらあとは市民サービスで開放し安い価格で皆さんに使ってもらえるものもあるでしょうけれど、ビジネスとして成り立つような新しい価値、施設もしっかり作っていきたいと思っています。

続いてスポーツコンテンツホルダーの経営力強化についてです。スポーツという資源をどうやって活用してビジネスを展開していくのか、よく話に出てくるのが甲子園、高校野球です。教育の一環というのが高野連の方針のようですが、この人気コンテンツを使って相応の入場料や放映権を取って、その収益を各高校のグラウンド整備などに充てていくことができないだろうか。それが我々の率直な考え方、主張なのです。肝心なのは得た分をちゃんと還元していくことです。競技団体や高校だけじゃなくて地域も含めてビジネス化を図り、継続的な取り組みにしていく。その知恵を出し合いたいということなのです。

### 野球離れを救ったボールパーク

日本と欧米のプロスポーツを比較してみましょう。1995年はメジャーリーグベースボールの分岐点になった年です。トルネード投法の野茂英雄がドジャースに行って旋風を巻き起こした年でもあるのですが、ストライキがあって開幕が遅れ、球場は閑古鳥が鳴くなど野球離れが深刻化しました。もちろん放映権料もガタ落ちです。この危機的な状況から脱出するきっかけとなったのがスタジアムアリーナ改革でした。単なる施設整備ではなく、一般のお客さんにどう楽しんでもらうかというハード、ソフトの両面から考え、実行したのがボールパークです。どういうことを試みたかという点、お客さんが球場に滞在する3～4時間の間にどれだけ財布のひもを緩めさせるかの勝負で、試合をじっと見ているだけではなく食べたり、飲んだり、お土産などの買い物をしたりしてもらうことを考えました。子供や家族連れが楽しめるボールパークも整備しました。さまざまなサービスを提供しながらスポーツの価値を生かし、いろ

いろいろなことに波及させていきました。これによって2010年段階でメジャーリーグは7300億円、日本は多少増えても1973億円と大きな差がついてしまったのです。日本でも近年、楽天とかDeNAベイスターズ、福岡ソフトバンクなどが新しい取り組みを始めています。ほかにも大学スポーツのコンテンツ価値の見直し、若者のゴルフ離れが進むゴルフ市場の活性化といった課題にも取り組んでいます。

次にスポーツ人材の育成ですが、これまでのメダリストや著名選手らのセカンドキャリア的な競技者養成に、経営の人材養成を加えていきたいと考えています。中央競技団体の現状を見てみますと、日本サッカー協会を除いてスタッフが非常に脆弱です。職員1~4人というところが最も多く、正規職員ゼロ、ボランティアだけという団体もあります。組織マネジメントの観点から市場拡大には経営力の強化が不可欠であり、人材が必要です。どうやって経営人材を育成していくか、議論が始まっています。

### スポーツと相性がいいテクノロジー

皆さんが関心をお持ちであろう他産業との融合による新たなビジネスの創出に触れます。テクノロジーの世界はスポーツと非常に相性がいいといわれます。エアラブル・キッドの導入によるスポーツを通じた健康ビジネス、スポーツデータの分析・活用がそうでしょう。当然のことながら競技力強化の観点からテクノロジーがどんどん活用されていて、ビジネスの分野でも使えないかという話が起きつつあります。トップクラスの研究開発、技術開発がスポーツにも波及していくでしょう。それらが健康とかエンドユーザーサイド、一般の方のレベルに落ちていくとさまざまなビジネスに活用されていきます。アップルとかマイクロソフト、グーグルなどがスポーツで高度な技術開発したものをヘルスケアサービスみたいなところに転用していこうと一生懸命取り組んでいます。

観光とスポーツの融合でいえば、三島の方でもやられていると思いますが、合宿とスポーツがあります。鹿島アントラーズがある鹿島市には天然芝を含めたたくさんのサッカーコートがあります。そこに全国から子供たちが集まってきて合宿を行

い、大会を開いています。これによって旅館業や飲食業が潤います。もともと鹿島は関東近辺の大学・サークルの合宿地だったのですが、ビジネスとしてはあまり見ていなかったようで、ある企業が合宿ビジネスとして展開し、成果を上げています。

健康と食ではタニタ食堂が有名ですが、食とスポーツの切り口からもさまざまな展開が期待できます。アスリート向けの食事などから一般の人々の食へ、例えば健康食という形でメニューを提供することなどができます。アプリを通じてやろうとしている会社が結構出て来ています。

スポーツを核にしながらサービスやテクノロジーなどさまざまなものを融合させるというビジネスが今、一番関心を持たれています。わかりやすい例でいうとスタジアムで透過式眼鏡型端末という端末を付けるとデータが映り込むとか、ゴルフの弾道線があります。ゴルフ中継で、ドライバーで打った弾道を線で示すものです。実はトラックマンというデータ解析ができるパソコンサイズの機器が横に置いてあって軌道とか飛距離、回転数などが分かります。もともとはミサイルの弾道を分析するために開発されたものですが、ゴルフに転用されてトップクラスは練習にも活用しています。野球場でも打球の分析などに利用されています。

障害者のための器具開発を一般の人向けに転用する取り組みも行われています。どんな効果があるのか、どういう風に日常的に使われると楽になるのか。自転車のアシスト機能がいい例ですが、今ではすっかり定着し社会に溶け込んでいます。高齢社会が進む中で障害者スポーツで実証できた補助器具などをどう市場化していくかが新分野となるでしょう。

スポーツは記録をはじめデータが豊富です。より細分化させ分析することでさまざまな商品開発、製品開発に生かしていくことが期待されています。体操競技に「ひねり」が特徴の白井という選手がいます。この白井選手の技は何回ひねりだったかを判定する技術開発に体操協会と富士通がタイアップして取り組み、国際大会を含めた試合の採点に使おうとしています。技術を使って可視化することによってより正確な判定を目指しています。こうした技術を会場での映像やテレビ中継に反映

させることによって「見る」楽しみが増し、他分野への転用が生まれるかもしれません。こうした新テクノロジーとスポーツの融合でいろいろなビジネスが生まれてくると思います。

### 企業の「資源」生かし、新ビジネスに挑戦

スポーツとテクノロジーの融合というとハイレベルな話のように聞こえるかもしれませんが、私が言いたいのはスポーツに関係していようがまいがは関係なく、それぞれの価値を見直していただきたいということです。それがビジネスの第一歩だと思っからです。例えば富士通と日本体操協会のタイアップの件ですが、富士通の持つ技術と体操協会の意向が合致した背景には渡辺さんという専務理事の存在があります。国際体操連盟の会長になられる方ですがもともとはビジネスマンです。ビジネスの分かっている方が協会にいて、富士通の相談に「その技術使えるね。うちでやってみないか」ということで始まったのです。我々はさまざまな企業が持っている力、技術力だったりサービス力だったり、そういう資源をスポーツでどういうことに使えるのかを考え、アプローチをしていただきたいと思っています。国としてもマッチングの場の提供などに努めてまいります。これまではスポーツの中だけで議論されていたことに外部の知見が入り、さまざまなバックグラウンドを持つ人たちがそこに集ってビジネスを展開していくことが極めて重要になっています。スポーツ市場規模を拡大していく上で重要な要素だと考えています。

### 幅を広げ参加人口を増やせばビジネスが生まれる

最後はスポーツ参加人口の拡大です。これまでに紹介・説明したのはどちらかというとサプライサイドの議論でしたが、スポーツを楽しむことができる環境をしっかりと整備していこうとしています。これは卓球の例ですが、直径を数センチ大きくしたボールを使います。直径を大きくするとボールがそんなに速いスピードでは動かなくなります。これによって高齢者の方でも卓球が身近に楽しめるようになり、高齢者の卓球人口が増えてきまし

た。卓球協会とモノづくり企業のちょっとしたアイデアから生まれた偶然の産物だそうです。

スポーツ実施率は先ほども申し上げましたが現状の40%から65%に引き上げていきたい。直近のデータを見ると、週1回、30分以上の方は40.4%で前回調査を7.1%下回っています。五輪後のデータですのでスポーツ＝競技のイメージが強かったのかもしれませんが、実施率は高めていかなければなりません。産業、ビジネスの面からも重要なことです。

ターゲットをどうとらえていったらいいのか。実施率を年代別にみると20代から30代が極めて低いことがわかります。仕事や子育てで忙しくなる世代ですからスポーツをする余裕がありません。いえるのはスポーツをバレーボールやサッカーなど学校体育の延長線上でとらえてはいないかということです。スポーツ＝バレー、サッカーといった既存概念やカテゴリーを取り払い、そこに新しいスポーツを持ち込めないだろうかと考えています。スポーツの幅を広げ、実施率の向上につなげていくことが重要です。そのためには前例主義とか固定概念とかを覆し、競技の世界とは別に新しいスポーツをどんどん開発していったらいいじゃないかと思っます。

2020年の東京五輪・パラリンピックはスポーツという概念を見つめ直してみる絶好の好機、タイミングではないでしょうか。五輪は金メダルの数だけではないはずです。我々もいろんなデータや情報を提供してまいります。皆さんもビジネスの面から目の前にあるスポーツって何だろう、日常的な業務とどのようなかわりがあるだろうかなどということをお考えいただきたいと思っます。

### ＜講師プロフィール＞

■まつやま・だいき 氏 東京国際映画祭事務局などを経て2011年経済産業省中途入省。エネルギー政策、地域経済産業政策、地方創生などを担当し、昨年11月にスポーツ庁に出向。スポーツ庁創設に伴い新設された現部署にてスポーツ産業振興策の立案・実施を担当。

## パネル 討論

# 「スポーツ産業化と地域の創生」



### 〈パネリスト〉

桂田 隆行氏(日本政策投資銀行地域企画部参事役)  
中村 哲也氏(羽立工業社長)  
宮崎 眞行氏(静岡県東部地域スポーツ産業振興協議会専務理事)

### 〈コーディネーター〉

青山 茂氏(シード副社長、サンフロント21懇話会TESS研究員)

◆青山 松山さんの基調講演をお聞きしてスポーツを国家戦略の中枢に据えていくという政策の変化、転換がはっきりと見えてきました。スポーツ産業は基幹産業としての振興はもちろん、健康、介護とかも含めて広範なすそ野を持っています。国が本腰を入れて取り組んでいくと受け止めることが基本的なスタンスとして必要だと思います。

静岡県の場合、西部、東部、中部にスポーツ産業振興協議会が設立されています。その背景には2008年リーマンショック以降の製造業の落ち込みがあります。輸送機器輸出の不振とか観光の低迷などが影響し、立ち直りには苦慮してきました。そうした中でさまざまな産業資源を持つ静岡県らしい取り組み、強みの発揮をとということでスポーツ産業振興のための協議会が設立されました。本日は国が旗振りを鮮明にしたスポーツ産業に東部地域はどうかかわっていったらいいのか。その方向性、指針を見出すことができればということでパネル討論を始めさせていただきます。

日本政策投資銀行でスポーツを通じたまちづくりなどの企画部門に携わっていらっしゃる桂田さんに、なぜ今スポーツ産業が有益かなど全体像に

ついてお話をいただきたいのですが。

### 地域で取り組みやすい「スポーツ産業」協議会発足3年、サイクリングなど3部会

◆桂田 スポーツで地域活性化、地域企画ができないかと地域企画部という部署で取り組んでいます。スポーツによるまちづくりでは今、スタジアムアリーナが注目されていますが、「スポーツ産業」という言葉が市民権を得たのはつい最近のことです。シナジー効果や異業種との連携などさまざまな発展型があるので、あえて定義づけをする必要がないように思います。

数字で整理することも必要なので申し上げますと、スポーツ産業市場は5.5兆円とされていますが、私どもの試算だともう少しあって6兆円を超え7.1兆円ぐらいになります。何を入れるか入れないかで数字は分かれてきますが、競馬とか競輪などの公営ギャンブルをスポーツととらえるとさらに増えて11兆円規模になるといわれます。

もう一つ強調したいのは地域での比率が割と高くできる産業だということです。合宿とスポーツ、

食とスポーツなどがそうであり、地域からもできて、いろいろなものとのシナジーが可能です。これが今のスポーツ産業の姿であり、市場規模は5.5兆円を上回っているのかもしれませんが。ここ急激に認知を得ている「スポーツ産業」という言葉を覚えていただけたらうれしいです。

◆青山 宮崎さん、東部地域スポーツ産業振興協議会の認知度はいかがですか。冒頭のあいさつで三島市の豊岡市長さんはまだまだ浸透していない、認知が十分でないとおっしゃっていましたが。

◆宮崎 2014年の発足ですが、「スポーツでモノづくりをする、それが産業になる」というような発想でスタートしました。今、東部の20市町と民間が約55団体の75団体が加盟しています。当初はスポーツ産業というのは総合産業でなかなか一つに絞れずうまくいきませんでした。そこで何らかの合意形成のもとに事業を進めていくことにしました。お手元のパンフレットにはいろいろ書いてありますが、現在このすべてをやっているわけではありません。できるところから少しずつというのが実状です。事業規模や人員配置などの課題もありますから。

基本的には3つの部会で取り組んでいます。まずサイクリング部会。ここではサイクリングを伊豆全体、東部全体を通したものにするためルート案を提案しています。次はクラブスポーツ部会です。アスルクラロ沼津のJ3参入が決まりました。沼津と付いていますが、東部地域全体でアスルクラロを応援していきます。ほかにも三島市の東レアローズがあります。これらを応援する中で地域産業の活性化につなげていきたいと考えています。3つ目は合宿・大会部会。合宿はスポーツの産業化に大きな役割を果たします。その誘致や大会の開催に向けて活動しています。加えてこうした活動をフォローする人材、ボランティアの育成を学生を対象に取り組んでいるところです。

◆青山 きょうは湖西から羽立工業社長の中村さんにお越しいただいています。スポーツ関連メーカーを経営されるとともに西部地区の振興協議会のリーダーとしても活動されています。両面からお話がいただければ。

#### 社名はバドミントンの羽根に由来 振興協議会は転換期を迎えている

◆中村 羽立というのは珍しい社名ですが、私の苗字ではありません。バドミントンのシャトルコ

ック、羽根のプラスチック化に成功して特許を取って興こした会社であり、羽根で立った会社だから「羽立工業」となったわけです。創業は昭和31年。当時はバドミントンが英国から入ってきてまだ間もないころで、ちょうど戦後の高度成長が始まるというタイミングでしたから好況も経験しています。そういえば去年のテレビドラマ「下町ロケット」の1シーンで、娘の土屋太鳳がバドミントンに対する思いを語った時、父・阿部寛が「このシャトルにも熟練の技術が使われているんだよ」というセリフを発しています。当時、弊社はシャトルコックを開発して日本の特許を取ったのですが、英国の企業と特許裁判になり、日英特許裁判ということで話題にもなりました。最終的には和解という結果になりましたが、そんなエピソードが「下町ロケット」に盛り込まれたのだと思います。その後、羽根だけではなくラケットなども手掛け、総合ブランドメーカーを目指しましたが、大手にはなかなか勝てず、今はバドミントンから手を引きました。その代わりに、シニアスポーツで一時ブームになったゲートボールをはじめ、グランドゴルフとかパークゴルフ、最近ではノルディックウオークのポールを製造しています。こうしたモノづくりだけではなく、健康ソリューション事業とかサービス事業も展開するようになりました。

西部地域のスポーツ産業振興協議会は5年目に入っています。立地や環境の良さ、J1ジュピロ磐田の存在などを生かし、全国大会レベルのイベント誘致に力を入れてきました。今年はジュピロ磐田さんが国際ジュニアサッカーを実施し、遠州灘海岸を使ったタッチラグビーの静岡大会もやりました。私どもが提案したグランドゴルフの全国大会も来年3月開催の予定です。最初に手掛けた浜名湖ウオークフェスタは今年でもう4回目ですが、いずれは日本一のウオーキング大会にしたいと考えています。ただ今後の会の運営には難しい面もありまして転換期に来ているような気がします。いろいろなことをやるのではなく、もっと地域の特性を絞り込んだり、まちを挙げてとか全体で盛り上げていくようにしたりといった新しいプロジェクト部会の立ち上げを念頭に置き、企画運営委員会を重ねています。

◆青山 スポーツ関連産業のビジネス規模は非常に大きいと言われます。その経済効果、経済波及効果をどう見ていったらいいのでしょうか。桂田さん、お願いします。

## スタジアムアリーナを核にまちづくり スポーツバルで地域に横のつながり

◆桂田 先ほどスポーツ産業を定義づけするのは



桂田 隆行氏

なかなかむづかしいと申し上げましたが、スポーツ産業という言葉は言葉通りのスポーツ産業と、もう一つはスポーツ関連産業の2つに色分けさ

れると思います。スポーツ産業には用品製造・販売とかフィットネスクラブなどがあるでしょうし、関連産業というくくりには合宿、観光×スポーツ、施設×アリーナのスタジアムアリーナなどが含まれるでしょう。スタジアムアリーナのスタジアム、施設そのものはスポーツ産業かもしれませんが、スタジアムアプリをやったり、健康食品の食事を提供したりとなると関連産業なのかなと思います。

経済波及効果はテクニカルな処理の話になりますが、2015年に試し掛けをしたところ産業連関上のスポーツの波及効果は1.6倍ぐらいで、感覚的にいうと医療・福祉と同レベルでした。波及効果としてはそんなに大きくはないのですが、今やスポーツ産業自体が大きくなっているので波及効果はもっともっと伸びてくるはずだと見ています。私の持論です。

◆青山 もう一点伺います。アスクラロがJ3に参入します。以前、沼津の駅前にスタジアムをという話が出たことがあります。地方における複合スタジアムの有益性ってどうとらえたいのでしょうか。

◆桂田 私どものスマートメニューの概念はスポーツを核としたまちづくり、スタジアムアリーナを核とした交流、まちづくりにあります。正直に言ってスタジアムアリーナだけで赤字か黒字かを議論すると、どうやっても黒字にはなりません。でもそれで「作ることは無駄だ」ということはありません。スタジアムアリーナはスポーツの一番下のインフラ部分、お皿であり、その上に乗って上に伸ばし、横に伸ばして地域で黒字にしていく。上に伸ばすというのはIT活用で動画を見ながら

観戦できるようにしたり、観戦しやすい椅子とかを設けたりして、その分チケット代もちょっと上げます。スタジアムという皿の上に関連ビジネスを広げながら黒字化を目指すことです。横の展開は周辺地域の商店街などとの連携で滞留時間の延長を目指す。試合が終わった後に「皆で少し飲んでくれたらうれしいな」です。こういう概念で縦と横からスタジアム自体は赤字でもまち全体が黒字になる姿を目標にいくつかのスタジアムと取り組んでいます。

◆青山 宮崎さん、アスクラロとはどんな取り組みを。

◆宮崎 アスクラロの試合が終わった後、気軽に飲みに行きましょうというお店を募集し、スポーツバルという形で取り入れています。選手たちには「試合後にそちらに行って飲んでいただけるようなパフォーマンスをしますから」などと売り込むことを提案し、実際に30なり40のお店が参加してくれました。観戦だけではなく2次的にいろんなものに波及する仕組みは非常にいいと思います。実はアスクラロは東レアローズと共同でポスターを作っています。それぞれにサポーターがいるわけですから、双方のサポーターが混在しながらスポーツバルが展開されていくといいですね。

◆青山 中村さんはバドミントンのシャトルから始まり、ゲートボール、グランドゴルフ、ノルディックウオークなどと事業展開されていますが、企業秘密に当たる部分もあるかと思いますが、その辺りの見方、読みといったものを聞かせてください。

### バドミントンから高齢者関連スポーツに転換 健康ソリューション事業は市場の要求でもある

◆中村 企業秘密ではなく、要はそれでやってい



中村 哲也氏

けなくなったから次のものを必死で探したということです。何とか見つけて今日まで生き延びてこられたというのが実情です。

バドミント

ンはオイルショックまででした。昭和30年代後半は米国や豪州、欧州にもラケットやシャトルを輸出していましたが、オイルショック以降は国内市場にも中国や台湾から安いものが次々と入ってくるようになり、ラケットも木製からアルミ製、グラスファイバー、そしてカーボンへと変化していきました。まだ木工工場が残っているところにゲートボールが始まり、切り替えました。そのゲートボールは一世を風靡し、経営にも貢献してくれたのですが、いろんな問題があって下火となり、現在は当時の市場規模の100分の1もないという市場になっています。うまい具合にグランドゴルフの市場ができていたのでそちらに切り替えました。そんな感じですが、私どものビジネスは高齢者スポーツとの関わりが深く、スポーツ用品メーカーだが健康ソリューションを勉強しているんだと考えるようになっていきました。

「スポーツをやらない人にもどンドンやってよ」と売り込むのはなかなか大変です。もともとスポーツをやらない人が7割、やっている人は3割というのが高齢者の現状で、とりわけ高齢になってからスポーツをやろうという人はいないでしょう。このスポーツを敬遠している、あるいは今更と感じている層に働きかけるには動機づけが必要です。そこで考えたのが体力テストです。体力年齢をその方に提供してちょっとモチベーションを上げ、「少し体を動かさなきゃ」という気持ちにさせて簡単な運動から始めてもらう。ウォーキングも普通に歩くよりもポールを持って歩けば、ポールは杖みたいなものですから膝が痛い方でも楽に歩けます。そして商品も売れると。そんな事業になっていったということです。市場の要求があり、そういう市場があるなどと思って入っていきました。

◆青山 具体的にはどんな普及活動を。

◆中村 ノルディックウォークは日本でも4つぐらいの協会があります。私どもが入っている連盟が一番スタンダードで、一番シェアが大きい協会ですが、指導員養成プログラムがあって私どもが事務局として指導員養成講座を開いています。指導員になってもらった方が県内で約350人。行政などから講習会や教室の開催要請があれば、その地域に近い方に声を掛けて運営していただくというような形をとっています。

実際のところ普及と商売を両立させることは非常に大変で、正直に言ってやっと商売になり始めたところなんです。これまではほかの事業で得た利益を先行投資的に普及活動に充ててきました。

◆青山 こうした普及活動が功を奏してか、三島市はノルディックウォークを健康、観光を含めて積極的に進められています。宮崎さんちょっと紹介していただけますか。

### 認定コース設けノルディックのメッカ目指す 宿泊はOKだが、合宿や大会の施設が不足

◆宮崎 ここからは三島市の宮崎で。三島市はノ



宮崎 眞行氏

ルディックウォークのメッカを目指しています。日本の認定コースを作りました。一つは中心市街地、もう一つは箱根西麓を歩くコースで、それ

ぞれにイベントをやっています。3月の市街地を歩く大会には親子連れとかも含めて約2500人の参加がありました。実際にノルディックで歩いた方は約300人ですが、人気の高さを示しています。観光協会と一緒にセールスにも出ていますが、名古屋の観光バス会社が数十台のツアーを組むと言ってくれました。実数は把握していませんが、多くの人たちに箱根西麓を歩いていただけたと思っています。

◆青山 今度はスポーツ産業振興協議会の宮崎さんに伺います。合宿プロジェクトは今後、どのように市場開拓していかれますか。

◆宮崎 合宿部会では東京の旅行代理店とセミナーを開き、現地視察もしながら大学生をはじめスポーツ関係の合宿誘致のモデル事業をやろうとしています。どういうエリアが当てはまるのかなどを研究し、新たな視点を盛り込んだものにしたいと考えています。ただ「泊まってはいただけるが施設がない」という話はよく出ます。

私たちの組織は協議会ですが、私はコミッションだと思っています。コミッションとしての機能をしっかりと身に付け、コーディネーター、調整役の役割を果たしていきたい。20市町と調整を図ったうえでシステム化を図るべきだと考えています。すぐに進まないのはわかっていますが、合宿とか大会誘致がこの地域に有益であれば、私たちは労を惜しまずに取り組んでいくつもりがあり

ます。

◆**青山** 学校とか企業が持っている施設の開放というのは合宿誘致の場合、必ずといっていいほどついて回る問題です。伊豆でも泊まる場所はあるけれどやるところがないということがついて回

ります。学校とか公共の施設、あるいは民間、企業の施設などを積極的に開放していくことが必要になってきます。松山さん、この辺はどう考えたらいいんでしょうか。

◆**松山** 学校施設の開放は文科省としてもこれまでやってきています。現状はというと、教育委員会の判断というレベルで何かあった時のリスク、管理体制はどうかというところから議論が始まっています。一方でおっしゃるようなことも我々の間では議論になってきています。日本ほど部活動をはじめ学校スポーツが多彩な国ってほかにありません。米国は部活動をやっても二つぐらいで、体育の授業というのはあまりないです。だけど日本は時期に応じていろんな種目をやっていて、施設も含めそれだけの設備を整えています。これは長所でありポテンシャルにも通じます。それをどうやって開放していくか、民間の人たちと一緒に運営していくのかということは議論として十分可能性があると言えます。

◆**青山** 国にしっかりと議論していただくとともに、地域は地域で解決していかなければなりません。桂田さん、解決するための場とかプラットフォームをどうとらえていますか。

◆**桂田** スポーツツーリズムの推進を掲げるプラットフォームは全国で始まっていますが、スポーツ産業のくくりではまだあまりないと私は理解しています。

実は国内で一番の先進地はここ静岡だと思っていました。追いかけているのは同じようにスポーツ産業クラスターという枠組みを持つ沖縄です。沖縄はスポーツ産業の人材育成をはじめスポーツ関係の合宿、アスリートの誘致も含めて頑張っています。トップをいく静岡に期待するところ大です。



青山 茂氏

◆**青山** 静岡は先進県だそうです。トップランナーには何が求められますか。

◆**桂田** 静岡県にはJリーグの4チームがあり、それぞれと組んで情報発信を進めていくことがまず大事かと思います。県民、エリアの皆さんの認知・理解を高め、スポーツってこんなに面白い世界なんだよということを知ってもらうことが必要です。

岡山の山陽新聞が「スポーツ新考」というコラムを長期連載し、岡山県民のスポーツに対する理解が深まったと聞いています。地域振興の新考はかなり新鮮で反響を呼び、スポーツで何かをしていこうという思いが地元の経済同友会、商工会議所、大学まで巻き込んでのプロジェクトが進むところまで来ています。

◆**青山** 情報発信は重要です。スポーツってこんなに面白いんだということを知っている人って意外と少ないようです。これから2020年の東京五輪・パラリンピックに向けて楽しみ方や見るスポーツの面白さなどを伝えていく必要があるし、盛り上げていけないといけません。そのためにはメディアの役割が非常に大きいわけですが、面白さを伝える、参加者を増やすという意味で東部スポーツ産業振興協議会も大きな役割を担っていると思いますが。

### 美しい伊豆創造センターなどと連携を 知恵を生かせば中小企業にもチャンス

◆**宮崎** 協議会に加入する20市町それぞれに観光とかスポーツをやられています。それらをまとめ上げるシステムを作る必要があるというふうに思っています。コミッションができれば民間とのマッチングも期待できます。

またこの地区には美しい伊豆創造センターがあります。そこでもサイクリングとか合宿、スポーツ観光などが命題となっています。加えて県も2020年に向け積極的に打って出ようとしています。情報の共有化や対話、そして方針の明確化、実効性のある事業などが伴わないと一つにはなれませんが、民間もついてきてくれないでしょう。それぞれに役割が担えるようにし、スピード感を持って活動していきたいと思っています。

◆**青山** 西部の状況はいかがですか。

◆**中村** ここに入っているとそのうちにいい話があるんじゃないかというような待ち組の方が多いですね。そんな感じでやっていると前には進みま

せん。この会を活用して積極的に自ら考え、想像力を働かせて企画を提案する人がもっと増えてこないとやっぱりうまくいかないと思います。

今ほどチャンスがある時はないと思っています。子どもはどちらかというと高齢者を対象に軽スポーツの普及を図り、そのスポーツをやってもらうという形で展開していますが、追い風というか市町村も国も健康になってもらった方がいいということで後押ししてくれています。知恵を働かせてやっていけば中小企業にもチャンスがある時代だと認識しています。

◆**青山** いろいろイベントも展開されていますが、商売として成り立っていますか。

◆**中村** 本来的には商売にしなければいけません。今年のウオークフェスタは赤字にはなりませんでした。天気の関係で参加者は前年の半分ほどでしたが、行政などからの補助金ゼロ、参加費のみという運営で、もちろん人件費は出ませんが、トータルで赤字にはならず済みました。これが1万人規模の大会になってくれればもっとメリットがあるでしょう。

◆**青山** 桂田さんあるいは松山さんに素朴な質問ですが、国、地方、そして企業とどういう風な接点を作っていったらいいのでしょうか。

### スポーツを通じた地域活性化に各地が意欲 具体的な提案や活動力で好機を

◆**松山** 国の方からのアプローチには成長戦略に基づく地方創生があります。自治体からの事業提案に対して審査を行い、交付金を付けていく制度です。これにスポーツが加わりました。これまでは自治体が地方交付金を取りに行く際には自治体内の部局間でしのぎを削り合って優劣をつけていて、どちらかというとスポーツは出しにくい環境にありました。今回からは行政サイドも地方創生の新しい試みとしてスポーツを通じた地域活性化のアイデアが堂々と出せるようになりました。おそらく来年の春以降、そういう申請が続々と出てくると思います。実際、我々のところにも自治体の方が毎日のように訪れ、スポーツコミッション、スタジアムアリーナなどについてやり取りをしています。今まさにスポーツを中心にした活性化が行政サイドの活性化を生み、いろんな政策が展開されていく素地が生まれようとしています。

◆**青山** 貴重な情報をありがとうございます。官と民が例えば協議会のようなものを組閣本部にし

ながら、提案できるものを組み立てていって玉づくりをしておくことが極めて有益であるということだと思います。きょうは国から松山さん、政策投資銀行から桂田さん、県西部から中村さん、そして東部は宮崎さんとそれぞれのお立場ではっきりとものをいう方に来ていただいております。会場からご質問があればお受けしますがいかがでしょう。テーマ自体がちょっと難しいところがあってなかなか手が挙がらないようです。

まとめに入ります。国が成長戦略の中核にスポーツを据えたということが明確になりました。市場規模でいうと、5.5兆円から2025年は15兆円、2020年がスタートというのがミソになっています。金メダルを取れば終わりじゃないんです。

2020年東京五輪・パラリンピックは大きなトレンド、潮流であり、逃してはいけないステージだと思います。成長産業、成長市場と考えて取り組む。やることをやらなければ成長しません。ほかの企業とのマッチングだったり、スポーツ産業振興協議会のような場を利用して可能性を拾い始めてみたりと、小さなことでもいいから拾い集めて大きく育てていきましょう。ただしこうした取り組みは地方創生絡みで全国に広がっています。静岡県は先進地とされているようですが、具体的な施策や活動力、パワーアップが図られなければ後続・後発の勢いに飲み込まれてしまうでしょう。このチャンスをつかむかどうかは我々地域の問題ではないでしょうか。

### 〈プロフィール〉

#### ◇パネリスト

■**かつらだ たかゆき 氏** 1999年日本開発銀行(現日本政策投資銀行)入行。化学業、ホテル・旅館業、観光業などへの企業の融資業務に携わる。現在は地域企画部でスポーツを活かしたまちづくり、地域活性化やスポーツ産業に関する調査研究を担当。2013年早稲田大学スポーツ科学研究科修士課程修了。早稲田大学スポーツビジネス研究招聘研究員。

■**なかむら てつや 氏** 静岡県立浜松北高、慶應義塾大学工学部を卒業後、岡村製作所入社。現在は羽立工業代表取締役、羽立化工代表取締役、HATCHI THAILAND. CO .LTD.代表取締役を務める。湖西少年少女発明クラブ会長。

■**みやざき まさゆき 氏** 三島市地域振興部長、産業振興部長を経て地域活性化戦略監。街中がせせらぎ事業、みしまコロッケの立ち上げなど産業政策を担当。東部スポーツ産業振興協議会創設に伴い理事を経て専務理事。三島市観光協会エグゼクティブアドバイザー、三島市地域ブランド推進協議会副会長。

#### ◇コーディネーター

■**あおやま しげる 氏** オリエンタルランドを経てシード入社。静岡県内外の企業及び自治体のプロジェクトのコンサルティングから事業プロデュースまで幅広く手掛ける。ふじのくにしずおか観光振興アドバイザー。スポーツ・ウエルネス総合企画研究所社長。

## ラジオマイトーク

【平成28年12月18日放送】



### 中古車・不動産の買い取りを展開

おお うち ひで お  
**大内 秀夫 氏**

(株)オートベル代表取締役

- ▽モットー 謙虚にして奢らず
- ▽趣味 海釣り、JAZZトロンボーン
- ▽出身地 茨城県

#### 〈お話のポイント〉

♠中古車・不動産の買い取りを行っています。県内15店舗、愛知県に2店舗の計17店舗あります。昔の恋愛ツールは車、今はスマホやマイルーム。若者の車に対する欲求がだいぶ下がりました。来年から無人タクシーが走るかもしれません。新車が売れないと、中古車業界には車が集まってきませんので、増々厳しくなるようです。

♥マンションや一戸建てのマイホームの買取も行っていきます。

販売プロセスが同じだからです。

集客して、商談して、査定して、リフォームして、

売り先決める。

◆毎年、社員表彰では上位15—20%の社員を海外旅行や沖縄、北海道旅行に招待しています。接待役は役員全員です。社内運動会、忘年会、全社研修などコミュニケーションを大切にしています。また、地域密着を奨励し、毎年、社員・家族を含め富士山で植林しています。

♣選暦を機にジャストロンボーンを習い始めて4年、今では慰問にも出掛けています。老後は元気なおばちゃん達に遊んでもらえるよう、おばちゃん達が嫌いな「仕切るな、威張るな、出しゃばるな」を心がけています。

## ラジオマイトーク

【平成29年2月12日放送】



### 広域連携の促進と魅力の情報発信

ひろ おか けん いち  
**広岡 健一 氏**

静岡県東部支援局長

- ▽モットー 相手方目線で物事を考える
- ▽趣味 サッカー、静岡野球の観戦、娘のバスケットボール応援
- ▽出身地 静岡市

#### 〈お話のポイント〉

♠管轄地域は南伊豆地域を除く富士川以東の10市4町です。市町の、又は隣県との広域連携の促進と東部地域の魅力の情報発信を行なっています。

♥世界遺産の富士山と韮山反射炉があり、温泉、食材、交通インフラなどに恵まれた東部地域を如何に国内外の方々知ってもらおうかです。東京一極集中を是正するため、魅力ある地域づくりへの支援、交流人口の拡大、移住・定住の促進など、人口減少社会でも生活しやすい地域の実現を目指しています。

◆昨秋に10市4町の子育てに係る一押し施策をまとめて紹介するリーフレットを制作し、首都圏の若い世代にPRしています。東部地域が子育てしやすい所と分かってもらえるきっかけになればと思います。

♣昨年、静岡銀行と横浜銀行が観光振興をテーマにした協定を締結したのを契機に本県も神奈川県とその取組に参画しました。増加が見込める訪日外国人を対象に、両県をエリアとした県境のない観光地図を制作し、富士・箱根・伊豆に訪れてもらえるように働きかけていきます。